

An Evening about Whitehead

# ホワイトヘッドのゆるい

『日常の冒険』『連続と断絶』を手がかりに

2021年 8月 21日 19:00 START at ZOOM



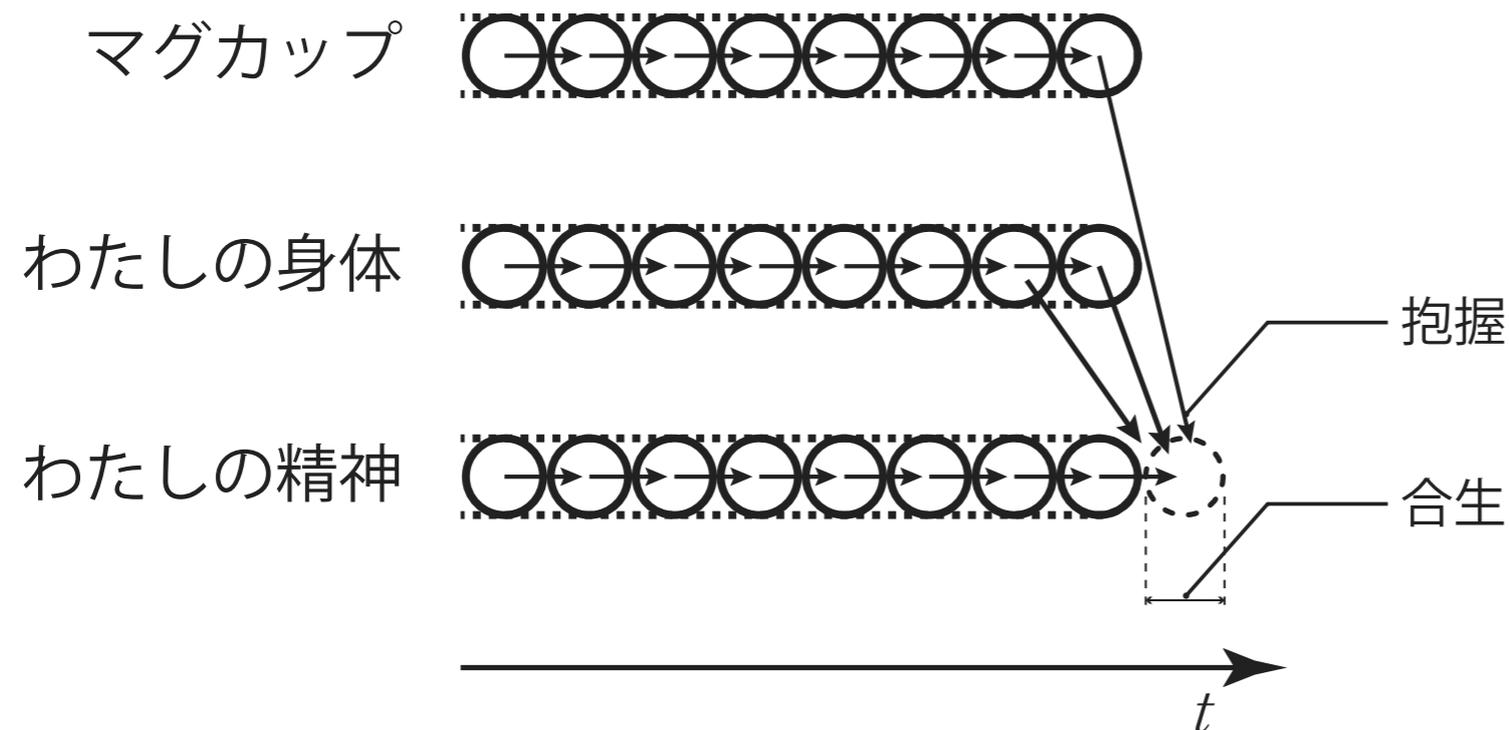
# 『日常の冒険』の冒険

— 佐藤陽祐『日常の冒険』を読む —

2021年8月21日  
ホワイトヘッドのゆうべ  
発表：飯盛元章

# 冒険のまえに

- ホワイトヘッドの世界観の基本的な点を確認！最低限の装備を整える。
- 日常的にわたしたちは、事物が同一性を保ったまま存続している、と思っている。
- No！あらゆるものは、一瞬一瞬、生成消滅している。
- 生成する契機には、宇宙における過去のすべての契機が関係してくる。



# 冒険のまえに (2)

- ホワイトヘッド形而上学のふたつの特徴。

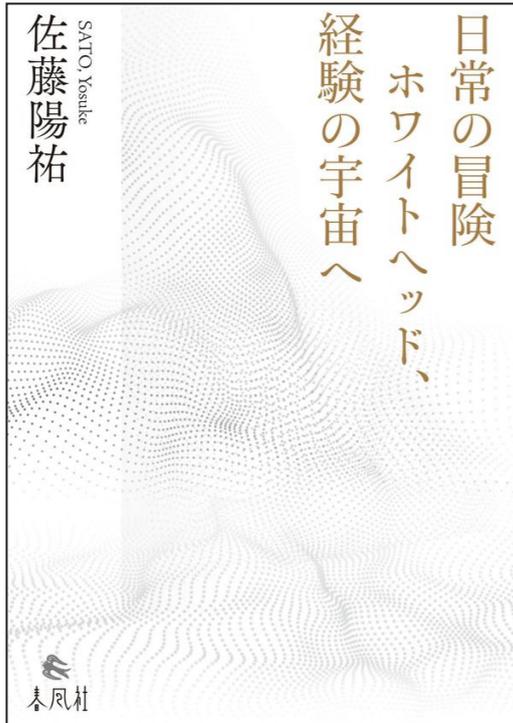
## ① フラットな存在論

あらゆるタイプの存在者（人間の意識的経験、ねこ、大質量ブラックホール、ハンマー、電子、シダの葉など）がみな一様に「**現実的存在 / 実質**」(actual entity) ないし「**現実的契機**」(actual occasion)である。「経験のしずく」。人間の意識だけが特権的なのではない。

## ② 関係主義的存在論

あらたな現実的存在は、宇宙の他のあらゆる現実的存在を「**抱握**」(prehension) という関係的な働きをとおして受容する。そうした無数の抱握を「**合生**」(concrecence) という生成過程をつうじて統合し、最終的に自らの具体的な個性を獲得する。この〈猫の欠伸〉が成立するには、宇宙のすべての存在者が必要。

# 『日常の冒険』と『連続と断絶』の断絶



認識論的  
(知覚論的)

ミクロな構造  
を扱う

関係優位の  
構造に対して  
好意的

シャーマンの  
スタイル



存在論的

マクロな構造  
を扱う

関係優位の  
構造に対して  
非好意的

検察官的  
スタイル

# 冒険のあらし

## 『日常の冒険』の特徴

- ホワイトヘッドの図式にもとづいて、人間の意識的経験の成立を解明。

## 「命題」を重視

- 「命題」 (proposition) = 現実的存在の結合体 (まとまり) + 永遠的客体
- ホワイトヘッドの図式には、現実的存在という時間的な存在者に加えて、「永遠的客体」 (eternal object) という無時間的な存在者がある。
- 永遠的客体：哲学で言う「普遍」「イデア」。たとえば「赤さ」など
- 現実的存在の結合体を「主語」とし、永遠的客体を「述語」として統合した存在者が「命題」。「それは赤い」など。
- 人間の高度な意識的経験が成立するために必要となるもの。

# 冒険のあらまし (2)

## 命題にもとづく知覚論

### ■ 合生過程の4段階

- ① 物的感じの相 : 過去の現実的存在を抱握する (感じる)
- ② 概念的感じの相 : 過去の現実的存在から永遠的客体を抽出 (抽象)。その永遠的客体を抱握。
- ③ 命題的感じの相 : 現実的存在と永遠的客体から成る命題を抱握  
→ ① + ②
- ④ 比較的感じの相 : 現実的存在と命題から成る「類的コントラスト」を抱握 → ① + ③

- ④の段階において、意識が成立する。

# 冒険のあらまし (3)

## 命題にもとづく知覚論 つづき

- 命題は「理論」とも呼ばれる。命題にもとづく意識経験 (④) は、「理論負荷的」なあり方 (ハンソン) をしている。
- 「命題の役割とは、ハンソンの「理論」の構成である。さらに、類的コントラストの感受は、命題を生との与件と対照する際に引き受けるという点で「理論」を「負荷」されている事態だと解釈できる。つまり、命題という理論負荷によって、世界はわれわれにそのように現れてくるところのものとなる」 (93頁)。
- 命題によって、現実世界を「～として」見ることができるようになる。

# 冒険のあらまし (4)

## もうひとつの知覚論—象徴的関連付け

- ホワイトヘッドの図式には、〈命題にもとづく知覚論〉とは別系統の知覚論がある。「象徴的関連付け」(symbolic reference)。
- 研究者のあいだで大人気(分かりやすいから)。3つの段階から成る。
  - ① 因果的効果 (causal efficacy)：外界ないし過去からの影響が経験のうちへと漠然と入ってくる感じ。身体感覚(胃もたれ)など。
  - ② 現前的直接性 (presentational immediacy)：空間化された判明な知覚。「感覚与件」で彩られた空間の知覚。
  - ③ 象徴的関連付け：①と②を結びつけて、知覚に厚みをもたらす働き。

# 冒険のあらまし (5)

## 命題にもとづく知覚論と象徴的関連付けを統合！

- 二つの知覚論の相違（140-142頁）。
  - 命題にもとづく知覚論：「発生論的分析」(genetic analysis)にもとづく。「命題にもとづく知覚論は現実的実質の生成過程において、プロセスに内在的に意識的知覚の発生を説明するのである」。
  - 象徴的関連付け：「座標的分析」(coordinate analysis)にもとづく。「象徴的関連付けは、現に起きている知覚の現場というものを説明する役割がある」。空間的。
- 「一つの体系において二つの知覚論を並立させるのは整合的ではない」(153頁)。二つの知覚論を統合する！

# 冒険のあらまし (6)

## 命題にもとづく知覚論と象徴的関連付けを統合！ つづき

- 統合の戦略 (同書第4章)
  - 象徴的関連付けと空間性・延長性の関わりが説明される箇所 (激ムズ箇所) を読解。「緊張の場所」(starin-locus) がキー。
  - 象徴的連関が成立する現場である緊張の場所において、命題が重要な役割を果たしていることを示す (もっともリスクで冒険的な議論！)。
- 統合のメリット
  - 象徴的関連付けには、可能的なものが関与しない。たんにそのように見えているだけ。
  - 命題には可能性が影のようにつきまとう。「それは赤い」→「青かったかもしれない」など。二つの知覚論を統合すると、可能的なものを含めた多様な知覚を説明可能。

# 冒険のさらにその先へ！

## 命題の本来的な力

- 『日常の冒険』は、これまで象徴的関連付けによって貶められていた〈命題にもとづく知覚論〉の地位を高めた。
- しかし、命題がもつ本来的な力を、知覚論のうちに閉じ込めているのではないか。命題の本来的な力は、存在論の根幹にかかわる(?)。
- 引用1 「主体の生成を支配する「主体的指向」とは、ある命題を、自己創造の過程において実現しようという目的の主体的形式でもって感じている主体である」(PR 25, 邦訳 42)。

# 冒険のさらにその先へ！ (2)

## 命題の本来的な力つづき

- 引用2 「この主体的統一性の範疇は、未完相での多くの感じに適用された予定調和説である。それゆえ、7種の「固有な」存在者へと立ち戻り、未完相をいかにして分類するかと問うならば、この未完相は命題の統一性を有しているのだと分かる。そうした各相が、ある過程のうちの一事象であるのは、創造的衝動のおかげなのだが、それから切り離されてしまった場合、この相は、それを構成する感じと究極的な超体にかんするたんなる命題であることになる。予定調和とは、この命題の自己一貫性、つまりその実現のための能力である」(PR 224, 邦訳 408)。

# 冒険のさらにもその先へ！ (3)

## 命題の本来的な力つづき

- 引用3 「合生過程の根拠ないし起源は、宇宙における与件の多性、つまり諸々の現実的存在と永遠的客体と命題と結合体である。合生におけるそれぞれの新しい相は、感じのリアルな統一性の次第に獲得されるのをまえにして、たんなる命題的統一性が退いていく、ということの意味する。継起するそれぞれの命題的相は、その実現を促す感じを生み出すための誘因である」(PR 224, 邦訳 409)。
- 命題は、合生過程において、相から相が生まだされる流れを「誘因」としてコントロールしているのではないか？
- あらゆるタイプの存在において働く、存在論的な装置。

# 冒険のさらにその先へ！(4)

## 「生(ナマ)の与件」のあり方？

- 「「それ」は最初から何かとして存在するわけではなく、もともとは「なにものでもないもの」、まさに生の与件としてある。まずもって、現実的実質の生成プロセスの原初相において、「なにものでもないもの」が漠然と受け取られる。…こうして「なにものでもないもの」は「それは〇〇である」という言語的構造を備えて、「それ」がある性質を備えた「対象として」現れてくる。この言語的構造を備えた与件がホワイトヘッドのいう命題であった」(『日常』84-85頁)。
- 〈未規定の素材が言語的に分節化されて、はじめてある対象になる〉という、いわゆるソシユール的な、言論的転回風のモデルが前提されているような感じがする。が、それで良いのか？

# 冒険のさらにその先へ！ (5)

## 「生(ナマ)の与件」のあり方？ つづき

- 「現実的実質の心的機能において、生の与件が命題という形で限定、抽象される。しかし、ホワイトヘッドによればこれは生の与件を精緻に把握するのではなく、むしろ単純化しているのである。というのも、生の与件としての現実世界は、より複雑で豊饒だからだ。この豊饒な現実世界を現実的実質は自らにたいして、命題という形で経験可能な要素として抽象、限定することによって単純なものにしている」(『日常』97頁)。
- 「なにものでもないもの」であると同時に、複雑で豊饒な生の与件を、命題をつうじて単純化することで意識的経験が生まれてくる、というモデル。

# 冒険のさらにその先へ！ (6)

## 「生(ナマ)の与件」のあり方？ つづき

- 生の与件は、言語的構造による切り取りをなんでも受け入れる、豊饒な「アペイロン」みたいなものとして想定されている？
- しかし、原初相における与件は、生成を終えて有限な限定性を獲得した個体である。だとすると、言語的構造によってはじめて限定された対象性を獲得する豊饒なドロドロ的なものではない、ということにならないか。
- 生の与件は、どのようなあり方をしているのか。

# 冒険のさらにもその先へ！ (7)

## 宇宙の先細りのリスク

- 意識的経験は豊饒な与件を単純化する。
- もし宇宙に意識的な現実的存在しか生成しなくなったら、宇宙はどんどん単純化され、先細りしていくことになるか？ 存在論的ビッグクランチ。
- たしかに、意識的経験は強度を増大させて、新しさを生み出すのだ、とも言われるが。

# 冒険のさらにその先へ！ (8)

## ゾンビ現実的存在の可能性

- ホワイトヘッド形而上学における意識＝経験の与件のある部分にスポットライトを当てて、明瞭に浮かび上がらせる働き。
- ホワイトヘッドは、そうした働きが合生過程のなかでどのように生じてくるのかを説明している。
- それは、意識の機能の発生メカニズムにかんする説明であって、意識の現象性にかんする説明ではない。
- あらゆる意識的な現実的存在が、じつはほんとうの現象性を欠いた哲学的ゾンビであるということは思考可能である。
- ホワイトヘッドの体系において、現象性はどこでどのように生じるのか。

# 冒険のさらにもその先へ！ (9)

## さまざまなタイプの命題的感じ

- 命題的感じにはさまざまなタイプがある (cf. 『日常』 48頁)。
  - ① 本来的かつ直接的な知覚的感じ：〈与件A〉 + 〈与件Aから抽象された永遠的客體a〉 から成る命題を把握。もっとも純粹！
  - ② ①の派生形態の知覚的感じ：「轉換」(永遠的客體のマイナーチェンジ) や「変容」(与件のグルーピング) の介入によって、非本来的なものや、本来的かつ間接的なものが生じる。
  - ③ 想像的感じ：〈与件A〉 + 〈与件Bから抽象された永遠的客體b〉 から成る命題を把握。じっさいに生じたことから逸脱。
- 逸脱がゼロの①から、極大の③まで、さまざまな命題的感じがある。

# 冒険のさらにその先へ！ (10)

## さまざまなタイプの命題的感じ つづき

- 本来的かつ直接的な知覚的感じ (①) は、存在しうるのか。いかなるグルーピングもズレなしに、一つの現実的存在そのものをとらえる知覚。理念的な知覚にすぎないのではないか（『日常』49頁の例はすでにグルーピングが介入している、と言える）。
- 想像的感じ (③) 以上に逸脱度合いの大きな命題的感じを、ホワイトヘッドの議論から独立に考え出す (妄想する) ことはできないか。

# 本日のスライドのPDF



<https://bit.ly/20210821iimori>